ニホンイシガメ　*Mauremys japonica* (Temminck et Schlegel)

【選定理由】

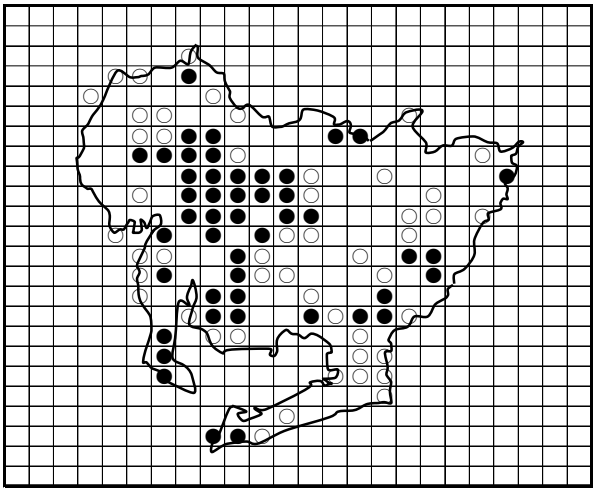
生息適地の喪失、および外来動物による捕食や生活への圧迫などの環境悪化に加え、性比の偏りや遺伝子汚染などの目に見えにくい問題も指摘されており、寿命が比較的長いこともあって、危機的な状況の進行が気づかれないまま放置されがちである。そうした背景を踏まえると、本種の生息地は今後、急速に減少する可能性があるため、注意喚起の意味を含め、準絶滅危惧種と評価された。

美浜町, 2015 年 1 月 15 日, 島田知彦 撮影

【形　態】

背甲長はオス約 12cm、メス約 20cm。背甲後部の縁が鋸歯状である。背甲は黄色ないし黄土色で、黒色か黒褐色の点模様が雲状に広がる。各椎甲板の前方中央部に、黒色の斑紋を持つ個体が多い。腹甲は一面黒色。四肢と尾は暗灰褐色か黒褐色で、前膊部と脛部の後縁および尾の背面の左右に、橙色の縦条がある。

県内分布図



【分布の概要】

日本固有種。国内では、本州の中部から西部にかけての地域、四国、九州に分布する。県内では尾張東部丘陵から三河地方、渥美半島、知多半島に分布する。濃尾平野の低地部にはほとんどいないが、小さな個体群がいくつかあり、至急の保護が望まれる。

【生息地の環境／生態的特性】

同属のクサガメが低地の止水あるいは止水に近い水系に主に生息するのに対して、本種は丘陵地から山地にかけての地域を中心に棲む。頭部が大きく頑丈なクサガメとは異なり、本種の頭部はほっそりしていて、礫の隙間にいる水生昆虫やサワガニなどを食べることができる。配偶期は秋と春で、期間が長い。貯精し、遅延受精することができるので、1 回の交尾で数年間有精卵を生み続けることができる。産卵期は 6～7 月ごろで、1 シーズンに 2 回産卵する個体が多い。1 回に 6～7 個前後の卵を産む。性染色体を持たず、産卵巣内の卵が高い温度に曝されるとメス、低ければオスになる。孵化した稚ガメは、その年の夏の終わりから秋にかけて地上に現れる。川の水底の落ち葉などの堆積物の下や岩の割れ目、あるいは川の岸辺の浸食された横穴や、池沼の水底で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地の環境の劣悪化が、減少の大きな要因である。温度依存的に性が決定されるので、産卵環境が好ましくないと、個体群の性比が偏ってしまう（Okada et al., 2011）。またアライグマやウシガエルなどの外来動物が、幼体や、場合によっては成体を捕食したり負傷させたりしている。生態的地位が似ている外来種のミシシッピアカミミガメによる生活の圧迫も深刻である。また、人為的に放逐されたクサガメと交雑して、繁殖能力のある雑種個体が生まれている。

【保全上の留意点】

本種が健全に日光浴、産卵、採餌、越冬、季節的移動できるように、河川や池沼の水辺エコトーンの再生、保全が急務である。本種を捕食ないし圧迫する外来動物は駆除する必要がある。特に本種の自然分布地で、クサガメとの交雑が確認された地域、あるいはハビタットの環境の均一化や個体群の高密度化などで交雑が起こる可能性が高い地域からは、クサガメを防除せざるを得ない。

【引用文献】

Okada, Y., T. Yabe, and S. Oda. 2011. Interpopulation variation in sex ratio of the Japanese pond turtle *Mauremys japonica* (Reptilia: Geoemydidae). Current Herpetology 30(1): 53-61.

（矢部　隆・島田知彦）